

森 鷗外

年 組 氏 名



鷗外の文学

森鷗外は漱石と並んで明治・大正時代に独自の態度を保ちつつ数多くの名作を生んだ大作家です。医者を志していましたが、同時に、訳詩集『母影』、雑誌「しがらみ草紙」を出すなど文学活動も行っていました。最初の小説『舞姫』、続いて『うたかたの記』『文づかい』と、ドイツ留学時代の成果を問うた三部作を発表して文学界に地位を確立しました。初期のころは、翻訳・評論などで明治の文学界に大きな影響を与えましたが、大正期以降は、『阿部一族』など、主として歴史に取材した小説を発表、武士社会に生きる人間の「意地」を描き、そこにある倫理的問題を追及して独自の解釈を加えました。また、安楽死の問題を提起した『高瀬舟』などの歴史小説は、後のテーマ小説のさきがけともなりました。総じて鷗外の文学は、東西文化に対する高い知性・教養を基盤に、現実的な精神と理想主義的な精神の調和の上に成り立っている、スケールの大きさを感じさせるものとなっています。

〈略年譜〉

年号（西暦）	歳	事 柄
文久2（一八六二）	0	岩見国鹿足郡津和野町（現島根県津和野町）で誕生。本名林太郎。
明治5（一八七二）	10	父と上京。ドイツ語を学ぶ。
7（一八七四）	12	年齢をいつわり第一大学区医学校（現東京大学医学部）予科に入學。
14（一八八二）	19	東京大学医学部卒業。陸軍軍医副として陸軍病院に勤める。
17（一八八四）	22	ドイツ留学。ミュンヘン大学、ベルリン大学で学ぶ。
21（一八八八）	26	イギリス・フランスを経て帰国。陸軍軍医舎の教官に就任。
22（一八九〇）	27	赤松登志子と結婚。
23（一八九一）	28	妻と離婚。
24（一八九二）	29	坪内逍遙と「没理想論争」。
25（一八九三）	30	文京区本郷千駄木に転居。家を「観潮楼」と名づける。
27（一八九四）	32	日清戦争に軍医として従軍。
32（一八九九）	37	九州小倉に転居。
35（一九〇三）	40	帰京。荒木志げと結婚。
37（一九〇四）	42	日露戦争に軍医として従軍。
40（一九〇七）	45	陸軍軍医総監・陸軍省医務局長に就任。
43（一九一〇）	48	慶応義塾文学科顧問に就任。
45（一九一二）	50	明治天皇崩御。乃木大将夫妻殉死。
大正5（一九一六）	54	陸軍退官。
8（一九一九）	57	帝国美術院院長になる。
11（一九二二）	60	七月九日、肺結核のため死去。

〈主な作品の紹介〉

舞姫

短編小説。清新な異国情緒と典雅な和文体で読者を魅了した作品。

〔あらすじ〕 ドイツに派遣された秀才太田豊太郎は、自由な空気にふれて真の自我に目ざめる。踊り子エリスの経済的危機を救い親密になり、それがもとで免職になってしまふ。孤独になった豊太郎はエリスと同棲するが、親友相沢謙吉の友情により再び出世コースに乗り、エリスと別れてしまふ。狂乱するエリスを捨てて帰国する豊太郎の胸中には複雑なものがあつた。

阿部一族

短編小説。封建社会の「殉死」をめぐる武家気質の「意地」を扱った歴史小説。

〔あらすじ〕 肥後藩主細川忠利の死に際し、阿部弥一右衛門は殉死者の中に加えられず生き残り、周囲の非難を受けて無念腹を切る。嫡子権兵衛は、侮辱を受け禄高をへらされ、忠利の一周忌に武士をすてる行動に出て縛り首となった。阿部一族は権兵衛の屋敷にたてこもり討手を引き受けて滅亡する。

山椒太夫

短編小説。山椒太夫伝説を現代風に改め、作者の創作を加えた歴史小説。犠牲となる覚悟を決めた人間に表れる不思議な力を描いている。

〔あらすじ〕 一〇八〇年ごろ、筑紫に流された父を訪ねて、安寿と厨子王は母とともに岩代の国から旅に出た。三人は直江津で人買いにだまされ、母は佐渡へ、姉弟は丹後の由良の山椒太夫に売られる。そこで酷使されていたが、安寿は入水自殺して自ら犠牲となり、弟を都へ脱出させる。厨子王は都で正道と名のり、後に丹後の国主となり、人の売買を禁じ、佐渡で盲目の母とめぐり会う。

〔本文〕 あくる朝、二人の子供は背に籠を負い腰に鎌を挿して、手を引き合つて木戸を出た。山椒太夫の所に來てから、二人一しよに歩くのはこれが初めてである。厨子王は姉の心を付り兼ねて、寂しいような、悲しいような思いに胸が一ぱいになっている。きのうも奴頭の帰ったあとで、いろいろに詞を設けて尋ねたが、姉はひとり何事かを考えているらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまった。

山の麓に來た時、厨子王はこらえ兼ねて言った。「姉さん。わたしはこうして久し振りで一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはこうして手を引いていながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見るのが出来ません。姉さん。あなたはわたしに隠して、何か考えていますね。なぜそれをわたしに言うて聞かせてくれないのです。」

高瀬舟

短編小説。「安楽死」の問題を提起する。後の「テーマ小説」の先駆をなす作品。

〔あらすじ〕 弟殺しの罪で高瀬舟に乘せられた喜助は、はればれとしてゐる。不思議に思つてその心持ちを問う護送の同心羽田庄兵衛に、喜助は島に送つて食べさせてくれる上に二〇〇文をもらつてありがたいと言う。弟殺しというのは、自殺を図つて死にきれず苦しんでゐる弟を助けて死なせてやつたということであつた。

〔書き出し〕 高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞いをすることを許された。それから罪人は高瀬舟に乘せられて、大阪へ廻されるのであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心で、この同心は罪人の親類の中で、主立った一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つたことではないが、いわゆる大目に見るのであつた。黙許であつた。